



そで触れ合うも他生の縁

学校法人 四天王寺学園
常務理事

坂本 峰徳

新年度を迎え、本誌読者の方々も様々な出会いがあったことと思います。昔からこういう時節には「そで触れ合うも他生の縁」という言葉が引用されていたのですが、学生の皆さんには馴染みが薄い言葉かもしれません。

私の世代でも「そで触れ合うも多少の縁」などとよく誤用されておりました。大意としては「道ですれ違うのに服が触れただけの間柄でも、この広い世の中で出会うのは貴重なことなのだから大事にしましょう」ということですので誤用のままでも通じなくはありません。

正解の「他生」は実は仏教用語です。現在、私たちがそれぞれ歩んでいる人生、「今生：こんじょう」だけが私たちのすべてではなく、魂は転生を繰り返してい

て過去、未来に無限の生涯（生まれ変わる先は人間とは限りません）があるとされており、それを「他生」と言います。

今生では衣服がちょっと触れ合っただけであっても、過去の他生においてその方と重要な出来事に関わっていた作用かもしれませんし、未来の他生でその方と大きく関わる原因になっていくのかもしれないので、小さなご縁も大切にしましょう、というのが本来の意味になります。

現代のバタフライエフェクトをはるかに上回るスケールの大きさが感じられる一方で、バタフライエフェクトのように不確実と突き放すのではなく、結果に責任を持って関わろうとする姿勢に仏教や聖徳太子の教えに一貫する真摯さがあるように思います。

新型コロナを経験し、私たちは人が互に関わることができる貴重さを改めて確認しました。小さなご縁も軽く扱わず、丁寧に大切にすることで、自ずと大きなことの結果の違いが生じていくものです。

また、本学とご縁をいただいた皆様には、仏教と聖徳太子の教えにもご縁が深いということが出来ます。いろいろなご縁を大切にさせていただき、たくさんのご縁を共に学ぶことができればと願っております。



利他の精神と「働くこと」

四天王寺大学・四天王寺大学短期大学部
副学長

和田 良彦

私は令和4年4月に四天王寺大学に赴任しましたが、聖徳太子の御遺志の一つである「利他の精神」を学ぶ中で、改めて「働くこと」との結びつきを考える機会を得ました。

「働くこと」について、私が深く考える機会を得たのは、40歳の時で、それまでは、「働くのはお金を稼ぐため。だから苦しくて当たり前。」という考えで、その意味について深く考えていませんでした。1997年に大阪府教育委員会の指導主事として、高校から大阪地域職業訓練センターに転勤した時のことでした。私は、若年者向け講座の運営担当をしましたが、応募してくる人は20歳代後半から30歳代前半の人たちで、「仕事が楽しくない」「自

分に合った仕事が見つからない」など仕事に悩みを持った人たちでした。

その講座で、講師の一人が受講生に対し次のような話をしたのがとても印象的で、私の「働くこと」に対する認識も大きく変わりました。講師の話は、「仕事というのは、お金をもらうためでもあるが、人の役に立つことである。あらゆる仕事は必ず人の役に立っている。そして、人の役に立っていることに気づくことが自分の満足感につながるのだ。仕事は、まず自分ではなく、まず人であり、その後自分が付いてくるのだ。」というものでした。

この40歳の時に私が学んだ「働くこと」の意味は、まさに利他の精神でした。「利他」の意味を詳しく知らず過ぎしてきた私は65歳にして、また新たな知識の結びつきを得ることができました。「働」という漢字は人偏（にんべん）に動と書きますが、これは国字（日本で作られた漢字）であり、「労働」は中国語（繁体）では「勞動」と書くそうです。日本でのみ、「働くこと」に「人」の意味を強調する考え方を持っていることに、太子由来の「利他の精神」が影響しているのかもしれません。「働」の歴史的由来についてさらに調べてみようと考えています。

特集記事 聖徳太子と四天王寺の太子ゆかりの宝物について —「聖徳太子一日出づる処の天子」に出陳された四天王寺の宝物をご紹介します—

令和3年9月から令和4年1月まで、大阪市立美術館・サントリー美術館（東京）において、聖徳太子千四百年御聖忌を記念する展覧会「聖徳太子一日出づる処の天子」が開催されました。この展覧会は、「なぜ、人々は聖徳太子をこれほどまでに尊び、また、現代においても太子ゆかりの寺院への参詣が途絶えないのか」とする問いに答えるべく企画されたものでした。

会期中に実際に展覧会場に足を運ばれ、聖徳太子没後1400年という記念の年にあたって、誰もが知っている聖徳太子にあらためて想いを馳せた方も多いと思いますが、このウパーヤの紙面においても、展覧会に出陳された四天王寺の聖徳太子ゆかりの宝物の一部を、カラー写真とともに振り返ってみたいと思います。

その1 聖徳太子のお姿

誰しも「聖徳太子」と聞けば、そのお姿をイメージすることができると思います。それはなぜでしょう。もちろん、かつては紙幣にも聖徳太子のお姿が描かれていたということもありますが、それ以上に、聖徳太子のご尊像が、それぞれの人にとってイメージしやすい、いろいろな年代のさまざまなお姿で描かれてきたという歴史があるからではないでしょうか。

絵画や彫刻としてあらわされる太子像は、主に以下の4パターンに分類することができます。

- 1)「二歳像」：2歳の聖徳太子が、上半身は裸で緋の袴をはき、合掌し「南無仏」と唱えたお姿で、「南無仏太子像」とも称されます。
- 2)「孝養像」：聖徳太子16歳の時、父の用明天皇の病氣平癒を柄香炉を手に仏に祈るお姿を表したものです。「孝養像」の中には、太子の足元に、4人もしくは6人の侍臣を小さく描き、彼らが太子を礼拝する様子を描くもの

もあります。

3)「摂政像」：聖徳太子22歳のお姿です。袍をまとい、冠をつけ、両手で笏を執るといふ国家の礎を築いた為政者としての側面が強調されるお姿です。

4)「勝鬘経講讃像」：聖徳太子35歳のお姿です。冕冠をいだし、袈裟をつけて、勝鬘経を講讃するお姿です。

10世紀に編纂された『聖徳太子伝暦』は、それまでの太子伝の集大成ともいえるべきもので、太子の生涯を編年体で、つまり、聖徳太子の年齢ごとに様々な事績を当てはめる構成になっていました。この『伝暦』の記述にしたがって、聖徳太子のお姿は、幼子から壮年までの期間のさまざまな年齢で、いろいろなお姿で表現されることになったのです。こうして、信仰の対象でありながらも誰もが親しみやすいという聖徳太子イメージを形成することになったのです。

その2 四天王寺に所蔵される聖徳太子ゆかりの宝物—

「太子伝来七種の宝物」

四天王寺に所蔵される「太子伝来七種の宝物」は、聖徳太子が実際に所持されたと伝わる聖遺物ともいえるべきもので、展覧会には七種類すべてが出陳されました。その七種とは、①七星剣および丙子椒林剣、②鳴鏑矢、③唐花文袍残欠（太子緋御衣）、④龍笛・高麗笛（京不見御笛）、⑤懸守、⑥細字法華経、⑦四天王寺縁起（根本本）です。

それぞれの詳細は付属カラーページでご紹介しますが、この七種の宝物が、聖徳太子所持の宝物であったという伝承のもとに、今日まで1400年にわたって四天王寺に伝来してきた事実こそ、まさしく太子信仰の結晶であると言えるのではないのでしょうか。ぜひ、紙面にこれら貴重な宝物をご覧ください。

（河合由里絵・南谷美保）

「ウパーヤ」学生編集員募集！！

本学の仏教教育広報誌「ウパーヤ」の紙面作りに参加していただける学生編集員を募集しています。仏教、寺院、仏像、巡礼、歴史、日本文化などに興味のある方、また取材や記事の執筆に関心のある方ならどなたでも歓迎します。当然、学部学科専攻も問いません。

これまで第4面の「聖徳太子ゆかりの地をめぐる」の取材記事の執筆、およびその取材見学の様子をホームページに掲載するなどの活動をしてきました。また、本学が仏教教育の一環として実施している野中寺での座禅会に参加し、その実施状況をレポート

していただいたこともあります。

興味のある方、詳しい話を聞きたいという方は、第4面下に記載されているメールアドレスにメールを寄せていただくか、仏教文化研究所の研究員にお声を掛けてください。

ご連絡お待ちしております。

（中田 貴真）



～聖徳太子のご生涯～

二歳像



2歳

優れた能力を発揮した
幼児期のお姿

孝養像



16歳

在俗でありながら
僧形で父の病氣平癒を
祈るお姿

摂政像



22歳

国家の礎を築いた
為政者としてのお姿

勝鬘経講讃像

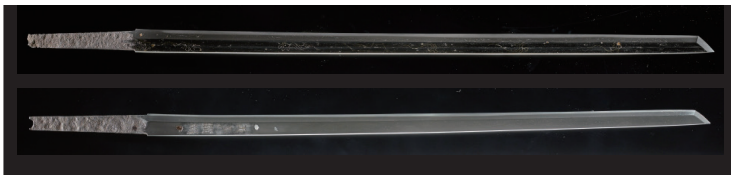


35歳

為政者でありながら
仏の教えを説く宗教者
としてのお姿

～四天王寺所蔵・太子伝来七種の宝物～

その①:七星剣・丙子椒林剣(国宝・飛鳥時代)



七星剣には星雲などの文様を、丙子椒林剣には「丙子椒林」を
金象嵌で表す。



太子の武器
といえば...

その②:鳴鏑矢(重要文化財・飛鳥時代)



射放した際に咆哮することから、鳴鏑矢という。聖徳太子が
仏教排斥派・物部守屋の討伐に用いた矢と伝わる。

その③:唐花文袍残欠(太子緋御衣)
(重要文化財・飛鳥時代)



太子が着用していた袍の残闕。古代裂として貴重。



太子の赤い衣が
よく目立つ!

聖徳太子絵伝(重要文化財・1323年)



矢を手にする太子の姿は絵画に見られる。

聖徳太子絵伝(前掲)



伎楽伝来の場面。
どの場面でも
必ず赤い衣を
身に付けている。

伎楽を奨励
した太子は、
音楽芸能の祖!



その④：龍笛・高麗笛(京不見御笛)(鎌倉時代)

太子信仰とともに大切にされてきた舞楽



太子愛用の笛とされ、かつては聖霊会の舞楽「蘇莫者」で使用されていた。

蘇莫者



太子が吹く「京不見御笛」の音を聞いた信貴山の神が、猿の姿で現れ舞った様子を模した舞。

聖徳太子童形半跏像



聖霊会は、4月22日に四天王寺で行われる最も大きな法要。童形半跏像は令和3年に聖霊会行像として復興された。

天王寺舞楽は、とりわけ平安貴族に愛好された。

四天王寺と平安貴族との関係は、

扇面法華経冊子
(国宝・平安時代)



扇形の装飾料紙に貴賤の風俗を描き表し、その上から法華経が書写された宝物。

太子ゆかりの
法華経

平安貴族の
美意識

その⑤：懸守(国宝・平安時代)



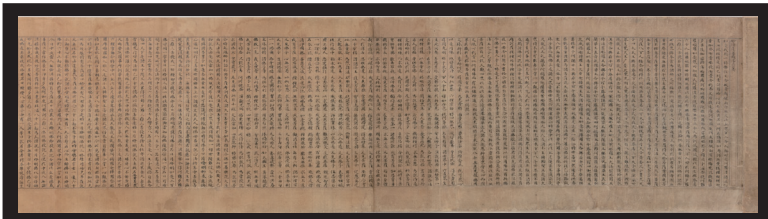
紐をつけて首から懸けるお守りで、女性や子供が旅の道中に携帯したもの。当山には7懸が伝来する。

懸守「桜折枝文」
納入品復元像

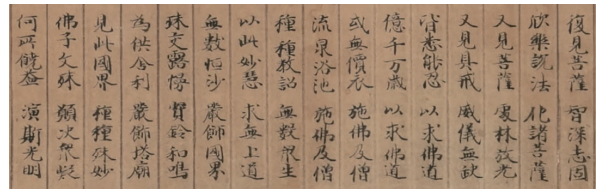


近年のCTスキャン調査により、懸守の中に精巧な仏像が納められていることが判明した。

その⑥：細字法華経(重要文化財・平安時代)



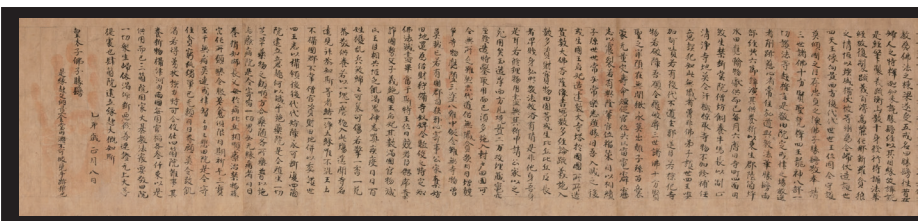
太子が前世の南岳大師慧思であったときに護持していた法華経で、太子が斑鳩宮の夢殿において感得したもの。



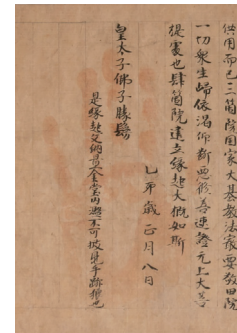
微細な文字によって、法華経が一巻の経巻にまとめられている。

太子の偉大さ

その⑦：四天王寺縁起(根本本)(国宝・平安時代)



四天王寺の縁起資料帳で、太子自らが記したものとされる。寛弘4年(1007)に金堂内の六重宝塔より発見された。



二十六箇の太子の手形が捺されていることから、「御手印縁起」ともいう。

『四天王寺縁起』(根本本)で「四天王寺の中心伽藍が極楽浄土の東門の中心にあたる」とされたことから、平安時代以降、四天王寺の西門周辺が浄土信仰の聖地となった。その修行の一つである「日想観」は、現代でも行われている。四天王寺では、聖徳太子ゆかりの宝物が大切に継承され、人々の聖徳太子への想いを護持してきた。

第22回 卒業生インタビュー

話し手：田村 亜弥（たむら あみ）堺市立金岡南中学校 養護教諭／令和4年3月 教育学部教育学科 保健教育コース 卒業生
聞き手：坂本 光徳（和の精神Ⅰ・Ⅱ導師・人文社会学部人間福祉学科専任講師、本欄編集）



仕事について

卒業後すぐに、現在の金岡南中学校で養護教諭として着任しました。合計900人以上の大規模な学校で、保健室への来室も多く1日20人を超えています。保健室は2人配置で、もう一人はベテランの養護教諭の先生と一緒にいてくれます。朝はまず健康チェックで、マイクロソフトのチームズを導入しています。欠席や理由の入力を保護者の方がチームズで送ってくださります。遅刻や、早退などの情報が分かり、その上で健康チェックをします。またコロナ陽性者や濃厚接触者の連絡があった人のリストをチェックして待機期間の連絡などをしています。コロナ関連は、冬になって増えてきています。

教室に入りにくい子も少し多いです。朝から学校に来るのに疲れてしまっただけで保健室に寄って休憩してから、朝学活は行けないけど一限目の授業は頑張りたいという子がいたら、少しおしゃべりしてから、送り出しています。朝が一番忙しいかもしれませんが。

その後の日中の生徒たちが居る間は、体調が悪い子がいたら、休むのか早退するのか、頑張れるのかなどの話も聞いたりします。また体育でよく怪我をしてくるので、病院にもよく連れて行きます。それは帰ってきた後、書類にまとめて教育委員会に提出するといった事務作業もあります。放課後は基本的に来室記録を振り返りながらデータ化して、年度末の学校保健委員会に資料として提出できるように準備しています。

就職して最初は凄く不安でした。一学期は健康診断などで追われてしまい、あまり子どもたちに構うというか、向き合う時間がとれず、今日検診だからごめんとか帰すこともあり、自分も新任で右も左も分からず、向き合う時間がとれなかったです。2学期になると、少し落ち着いて、面と向かってしっかり話そうことができるようになりました。何が嫌なのとか、何がしんどいのかを子どもたちと接しながら聞いているので、2学期はすごく充実したというか保健の先生をしているなど、イメージしていたことができています。

和の精神(礼拝)について

私は写経が好きでした。書道はしていないのですが、文字や手紙を書くのが好きでした。だから写経で集中した後は、お昼ご飯を食べて3限目の授業が頑張れるということもありました。集中力がつくのかなとは思いました。大講堂では別の学部の学生を見ることができ、そこは楽しかったです。また献灯当番もやりました。どきどきしながらでしたが、経験できて良かったと思っています。

初めて礼拝の授業を見た時は、驚きました。あまり宗教に縁遠かったので、たまに祖母の家でお鈴をならして手を合すぐらいでした。お経も聞いたことがなかったので新鮮でした。でも慣れると落ち着く部分もあり、落ち着き過ぎて眠たくなったりもしました。ただ注意されると恥ずかしいので頑張って起きていました。

仏教の講話は、分かる部分もあるけど、こういう考えがあるのだと新鮮に思うところがあり、色々な考えがあると思うきっかけになりました。今の子どもたちは、自分が子どもの時に考えなかった悩みを持っていたりとか、大人から見ると小さなことで気にしなくてよいことに悩んでいたり、でも子どもたちからすれば学校が全てだから、しんどく感じて心を痛めているよう

です。そういう色々な考えや、感じ方があるということへの理解に繋がるきっかけになりました。

学園訓について

健康は日ごろから関わっていることなので、「重んぜよ」と皆に言いたいです。礼儀は、私自身も厳しく育てられました。中学校でも挨拶運動を積極的にしていて、あまり知らない子でも廊下で会ったら挨拶してくれる子が多いので、それが当たり前に行けるのがすごいと思います。改めて学園訓を見て、実行できている生徒が中学校にも多くいると思いました。

また誠実は大変にしています。どんな子どもでも誠意をもって接していたら応えてくれます。子どもたちは敏感なのでちょっと忙しい時に来室した子などは忙しいことに気づき、シュツと出て行ったりします。次の日に来た時に、忙しくて時間がなかったことを謝り、今日は時間があることを言うと、ニコニコしながら話してくれます。一人ひとり誠実に見ていたら子どもたちもまた私のことを見ているので誠実は大変にしていきたいと思います。

四恩については、国はちょっと大き過ぎて私はまだ理解が足りないのですが、父母にはすごく支えられたし、世間(周りの人)にも恵まれて生きてきています。家が岸和田ということもあり、地域のつながりが濃くて、私は知らないけど向こうが知ってくれていることなどもあり、自分が学生生活を過ごし安心して生きていけたのは周りの人のおかげだったと思います。凄く支えられてきており、社会に返せるのなら、今保健室で働いているので私も子どもたちを支えられる大人にこれからはなっていけたらよいと思います。

在学生へのアドバイス

私は絶対保健室の先生になると思って入学したのでずっと勉強を欠かさずやってきました。ただ他の経験もいっぱいあったほうが良いです。勉強ばかりでも、多分現場では生きないし、本当に先生になりたいと思っているのであれば早いうちから経験を積んだほうが良いです。一年生でも、迷っていても少しでも先生になろうという気持ちがあれば、子どもたちと接する機会、スクールサポーターなどにまで行ってみれば良いと思います。ボランティアの制度も四天王寺大学は充実しており、そういう実戦経験を積む機会はずっと準備している大学だったと思います。利用しながら色々な先生に聞きまくって実践経験を積んで一番に勉強していたら夢は叶うと思います。途中で進路を変えても、その頑張りや経験はたぶん違う職場でも生きるのできっと糧になります。是非色々な経験をしてほしいと思います。

そして出来れば一緒に働きたいです。堺市でなくてもどこかで自分の後輩が同じように保健室とか学校で動いていると思ったら自分も頑張れます。「負けてられへんな、自分も頑張らな」と思えるので是非頑張りたいと思います。また採用試験は大変だけど、自分はゼミの岡本先生をはじめとした大学の先生方に頼り、たくさん助けてもらいながら合格することができました。自分一人の力では限界もあるので人に助けてもらうことも大切です。

令和4年度 冬学期「和の精神Ⅱ」講話題目

- | | |
|--|---|
| 9月22日 藤谷 厚生先生「冬学期授業について」「ウバーヤについて」
仲谷 和記先生「写経の効果」 | 11月24日 上野 舞斗先生「『卒業生インタビュー』から考える『和の精神Ⅰ』の意義」 |
| 9月29日 福光 由布先生「写経の仕方・作法」 | 12月1日 矢野野 隆男先生「学園訓『誠実』について」 |
| 10月6日 坂本 光徳先生「写経について」 | 12月8日 千葉 一夫先生「人権とは何だろうか？—私たちにできることを考える—」 |
| 10月13日 李 美子先生・学生編集委員「聖徳太子ゆかりの寺院」 | 12月15日 上續 宏道先生「聖徳太子と福祉の心」
杉中 康平先生「学園訓のエピソード入力について」 |
| 10月20日 南谷 美保先生「写経と『経供養』」 | 12月22日 能田 茂代先生・現職の卒業生・2年生学生「ライフケアの学びを永遠に」 |
| 10月27日 奥羽 充規先生「『納経』の勤め—巡礼の視点から—」 | 1月12日 中田 貴真先生「和の精神—花と暮らす—」 |
| 11月10日 藤谷 厚生先生「聖徳太子の教えと言葉」 | 展示内容企画・作成学生「『絵伝』から聖徳太子を知ろう」 |
| 11月17日 グローバル教育センター（学生・奥羽先生）「異文化を通して学んだこと」 | 1月19日 須原 祥二学長「終講にあたって」
藤谷 厚生先生「まとめ」 |

聖徳太子ゆかりの地をめぐる

かささぎもりのみや

一 鵜森宮、玉造稻荷神社(大阪市中央区) 一

JR環状線森ノ宮駅の向かいに鵜森宮神社があります。ここは聖徳太子が創建した神社で、そのために、この神社には聖徳太子の両親(用明天皇と穴穂部間人皇女)が祀られています。今では小さな神社ですが、造営当時は広大で、千石余に及んだといわれています。鵜森宮の社名の由来は598年(推古天皇6年)夏、新羅から贈られた鵜2羽をこの地の森で養育したことにさかのぼります。鵜は七夕伝説における七夕伝説における織姫と彦星の間をつなぐ掛け橋の役を担う鳥として有名で、朝鮮半島では古くから吉兆の印といわれています。鵜を育てた森は鵜の森と呼ばれ、神社の名前になりました。また、後世これを省略して森ノ宮と呼ばれるようになり、地名や駅名になりました。



鵜森宮

今では小さな神社ですが、造営当時は広大で、千石余に及んだといわれています。鵜森宮の社名の由来は598年(推古天皇6年)夏、新羅から贈られた鵜2羽をこの地の森で養育したことにさかのぼります。鵜は七夕伝説における七夕伝説における織姫と彦星の間をつなぐ掛け橋の役を担う鳥として有名で、朝鮮半島では古くから吉兆の印といわれています。鵜を育てた森は鵜の森と呼ばれ、神社の名前になりました。また、後世これを省略して森ノ宮と呼ばれるようになり、地名や駅名になりました。

鵜森宮に関する興味深い記述が『上宮聖徳太子伝補闕記』にあります。それは、四天王寺がはじめは「玉造の東岸の上」(森ノ宮)に造られ、その6年後に「荒陵村」(現在の四天王寺)に移されたというものです。では、なぜ6年という短い期間の間に四天王寺を移したのでしょうか。その答えは潮の被害・水難を避けるためだと考えることができます。当時、現在の大阪の半分は海でした。鵜森宮に伝わる伝説では、大陸や朝鮮半島に出やすく港として栄えていたこの森ノ宮の地に鵜森宮を造り、これを最初の四天王寺としたと伝

わっています。しかし、低地だったために潮の被害・水難に苦しみました。そこで、これを避けるために現在の四天王寺を建立したというわけです。「鵜森宮=元四天王寺」説は考古学的な知見からは否定されていますが、森ノ宮の由来である鵜森宮が元々四天王寺であったという説はとてもおもしろいですよね。

さて、この鵜森宮から南西に10分ほど歩くと玉造稻荷神社が見えてきます。紀元前12年(垂仁天皇18年)に創祀された神社です。蘇我氏と物部氏との確執から発展した戦い(丁未の乱)に参加した聖徳太子はこの玉造稻荷神社に陣を敷き「我に勝を与えるならこれに枝葉を生ぜしめよ」と「栗の白木」を差し込み戦勝を祈願したとされています。のちに「栗の白木」から見事な枝葉が生じ、勝利を得た太子は神社に観音堂を建立しました。明治期の神仏分離令により観音堂はその務めを終えましたが、現在もその遺構として偲び石があります。



偲び石

今回の取材を通じて、四天王寺以外の土地にも聖徳太子にまつわるさまざま伝承が残っていることを学ぶことができました。是非、皆さまも鵜森宮、玉造稻荷神社に訪れてみてください。

(山口 美空)

仏教のことば

解脱

仏教は、「仏が説いた教え」という意味でもありますが、同時に「仏と成る教え」でもあります。我々には煩惱があり、様々な事象に執われ、迷いの輪廻世界を彷徨っているとらえるのが、仏教の基本的な考えです。修行によって一切の煩惱が消滅し、苦しみである輪廻の世界を抜け出すことを、「解脱」(Vimokṣa)と言います。そうして一切の執着を滅して苦しみの無くなった境地である涅槃に到達することが、仏教の究極的な目標となります。ただ、すべての煩惱を滅し尽くして解脱に至るには、

三阿僧祇劫という膨大な時間が必要とも考えられています。一度や二度、生まれ変わり死に変わる間に、たとえ久修練行をしたとしても、なかなか解脱の境地に達することは難しいと言えます。釈尊自身、何度も生まれ変わりを繰り返す中で、執着を断つ行い衆生を救うという修行を完成されて、やつのことで解脱者である仏陀となられた訳です。

聖徳太子のご遺教として「世間虚仮 唯仏是真」という言葉があります。これは、この世は仮の世界(虚仮)であって、そこに執着を起こして輪廻の苦界を永遠に彷徨うのではなく、仏の説かれた真実の教えに従い、「解脱」の道に向かいなさいという、お諭しの言葉でもあります。解脱の道に向かうには、まずこの世が仮の世界であり、執着の心をできるだけ捨て、とらわれない自由な心を保つよう精進して行くことが肝要と言える訳です。

(藤谷 厚生)

編集後記

2022年度は四天王寺学園創立100周年の節目の年であり、昨年来の聖徳太子御聖忌1400年にも因んで、今回は「聖徳太子一日出づる処の天子」に展示された四天王寺の宝物を紹介する特集記事を、四天王寺勸学部の方々にもご協力を頂き、太子のご生涯や太子伝来七種の宝物(四天王寺所蔵)の画像も掲載されております。また坂本新常務理事の「そで触れ合うも他生の縁」や和田新副学長の「利他の精神と働くこと」のご寄稿もそれぞれ巻頭に頂戴しました。学生編集委員からは四天王寺の旧地とされる鵜森宮と太子ゆかりの玉造稻荷神社の取材記事や、さらに卒業生のインタビュー記事も掲載して、ボリュームある内容となりました。太子の仏教精神の教えを中心に、様々なご縁を大切に生きていくことの意義を改めて学べたように感じます。有り難うございました。(李 美子)

研究所員紹介

所長 須原 祥二(学長・教授)

主任研究員 藤谷 厚生(教授)

研究員

上綱 宏道(教授) 南谷 美保(教授)
矢野野 隆男(教授) 杉中 康平(教授)
奥羽 充規(准教授) 李 美子(准教授)
坂本 光徳(専任講師) 中田 貴真(専任講師)
上野 舞斗(助教)

客員研究員 桃尾 幸順

UPĀYA(ウパーヤ) 22号

ウパーヤとは「高い目標へ到達すること」を意味し、漢訳では「方便」となります。

令和5年4月1日発行

発行 四天王寺大学

仏教文化研究所 仏教教育センター

所在地 大阪府羽曳野市学園前3丁目2-1

TEL:072-956-3181(代) FAX:072-956-9940

URL:http://www.shitennoji.ac.jp/

「UPĀYA(ウパーヤ)」に関する
ご意見やご感想はこちらへお寄せください。
[E-mail] bukken@shitennoji.ac.jp
(件名は「ウパーヤ」としてください)

